

★【PISA2022】科学・数学的リテラシーの2分野、OECD37か国中第1位★

『PISA (Programme for International Student Assessment)』は、『OECD』が中心となり実施している『国際的な学習到達度に関する調査』。義務教育修了段階の『15歳の生徒(日本では高校1年生)』を対象に、これまでに身に付けてきた知識や技能を、実生活のさまざまな場面で直面する課題にどの程度活用できるかを測る目的で、『数学的リテラシー』『読解力』『科学的リテラシー』の3分野について、2000年から3年ごとに調査を実施している。

最新調査『PISA2022』の結果が昨年12月5日に発表された。日本は3分野のうち、『科学リテラシー』『数学的リテラシー』の2分野で、2位に大差をつけ『OECD加盟37か国中1位』となった。残りの『読解力』の分野においては『1位と差がない2位』であり、『3分野すべて世界トップレベル』となった。前回の『PISA2018』は『2019年12月3日』の発表であったが、日本はOECD加盟の37か国中、『数学的リテラシー』は1位、『科学的リテラシー』は2位にランクインした。しかし、『読解力』はなんと『11位』であり、調査開始以来、過去最低の記録であった。

共通テストに関しては今や、すべての教科・科目の問題がいまや『読解力』が必要なものばかり。かつての『数分で答えの出た問題』は絶滅し、1問の答えを導き出すために、『数分を消費する必要がある問題』ばかりだ。『暗記もの』『単純な計算のみ』という問題はなくなり、受験生泣かせの問題になっているが、その反面、この『PISA2022』の結果にあるように、『過去最低の11位』が『1位と差のない2位』にまで押し上げる結果となったのは、『主体的・対話的で深い学び』の視点からの授業改善を含む教育改革の賜(たまもの)と言えるだろう。

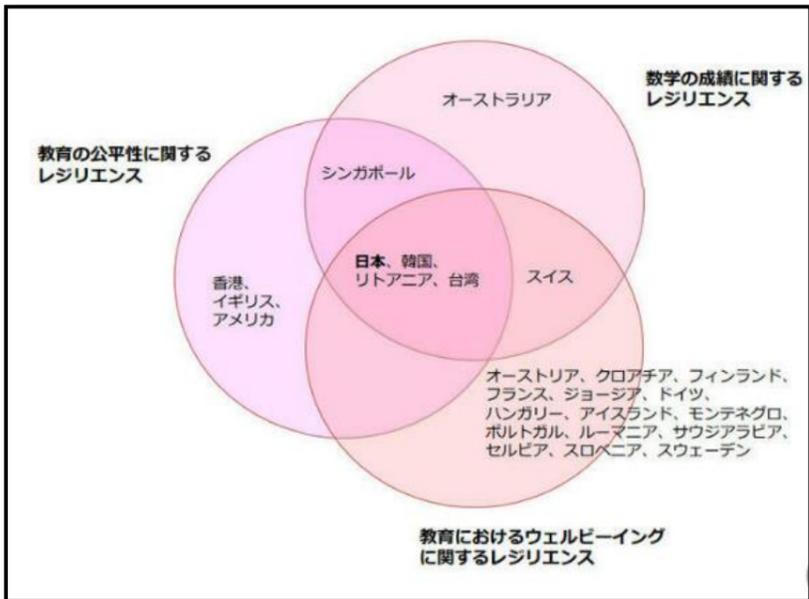
3分野の得点の国際比較(概要)

OECD加盟国(37か国)における比較

□ は日本の平均得点と統計的な有意差がない国

	数学的リテラシー	平均得点	読解力	平均得点	科学的リテラシー	平均得点
1	日本	536	アイルランド*	516	日本	547
2	韓国	527	日本	516	韓国	528
3	エストニア	510	韓国	515	エストニア	526
4	スイス	508	エストニア	511	カナダ*	515
5	カナダ*	497	カナダ*	507	フィンランド	511
6	オランダ*	493	アメリカ*	504	オーストラリア*	507
7	アイルランド*	492	ニュージーランド*	501	ニュージーランド*	504
8	ベルギー	489	オーストラリア*	498	アイルランド*	504
9	デンマーク*	489	イギリス*	494	スイス	503
10	イギリス*	489	フィンランド	490	スロベニア	500
	OECD平均	472	OECD平均	476	OECD平均	485
	信頼区間※(日本)	530-541	信頼区間(日本)	510-522	信頼区間(日本)	541-552

★【PISA2022】『レジリエントな』国・地域は日本、韓国、リトアニア、台湾★



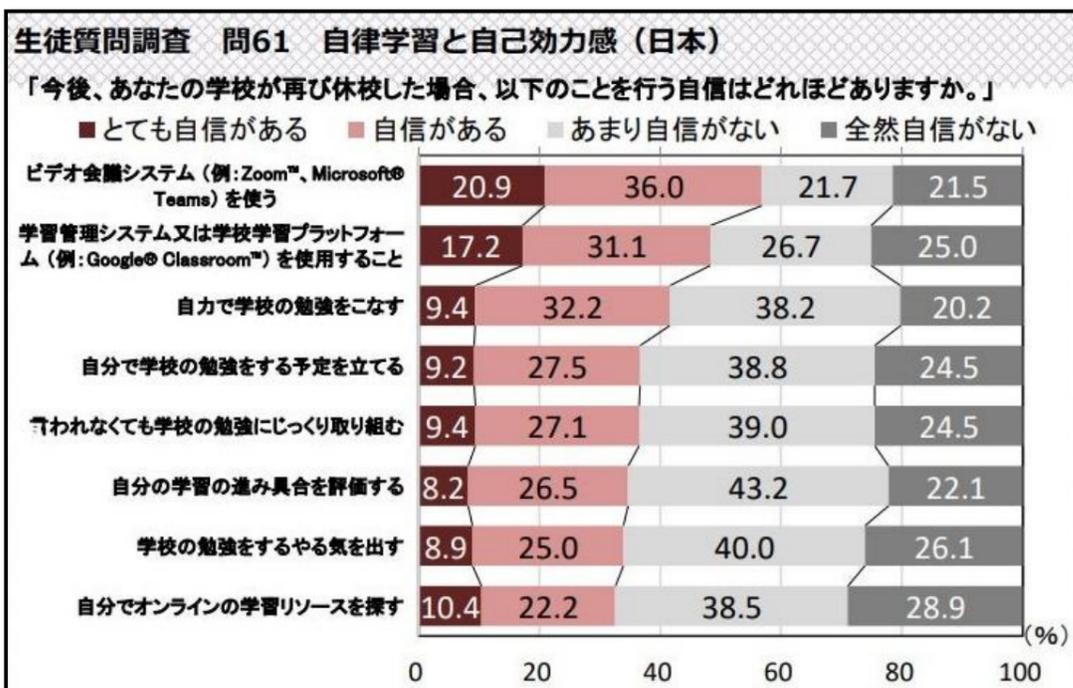
『OECD』は、『数学の成績に関するレジリエンス』『教育におけるウェルビーイングに関するレジリエンス』『教育の公平性に関するレジリエンス』の3つの側面について、2018年調査から2022年調査にかけての変化に着目し、その結果から『レジリエントな』国・地域を分析している。『レジリエント』とは『レジリエンスの高い』という形容詞だ。

『PISA2022』に参加した『81の国・地域』のうち、この3つの側面すべてにおいて安定または向上が見られた国・地域は、『日本、韓国、リトアニア、台湾』の4つのみであり、OECDは、これらの国・地域を『レジリエントな』国・地域としている。

この2018年から2022年に世界で何が起っていたか? 『新型コロナウイルス感染症』の爆発的な世界的拡大である。そのなかでも、この4つの国・地域は、『3つの側面のすべて』において『コロナ渦』であるのに『安定または向上』していたのだから『レジリエントな』国・地域と認定されたのであろう。休校が長かったのに下がらずに向上したのだ。

まして日本は、そんな状況下で『読解力』を『11位から2位に爆上げ』させているのだから、世界的に『なぜ、そんなことができるの?』と思われるかもしれない。国民性も影響しているだろうが、すごいことである。『読解』に苦勞しているきみ、効果はあるよ!

★【PISA2022】レジリエンスが高いが、自律学習「自信ない」約6割★



しかし、左図のように、OECDの分析によると『学校が再び休校になった場合に自律学習を行う自信があるか?』という質問に対し、『自信がない』と回答した生徒が日本は非常に多かった。

具体的には『自力で学校の勉強をこなす』に対し「あまり自信がない・全然自信がない」と回答した生徒は58.4%、『自分で学校の勉強をする予定を立てる』に対し「あまり自信がない・全然自信がない」と回答した生徒は63.3%、『言われなくても学校の勉強にじっくり取り組む』に対し「あまり自信がない・全然自信がない」と回答した生徒は63.5%、『学校の勉強をするやる気を出す』に対し「あまり自信がない・全然自信がない」と回答した生徒は66.1%であった。この結果から指標値を算出すると『日本はOECD加盟国37か国中34位』であり『自立学習』における大きな課題が露呈した。『セルフマネジメント』に自信がないのだ。

本校の『SAH非認知能力アンケート』においても『自由度の高い場面』における『非認知能力向上』を実感できていない生徒が多い。『自律学習』が本校でも大きな課題である。燃えよ、前南生、自律学習を制する者が『日本』を制すぞ! 文責: 星野 亨(教頭)

★校長より★

Journal Vol.10で紹介された、日本財団が2022年に実施した『18歳意識調査「国や社会に対する意識6カ国比較」』を思い出してほしい。「自分は責任ある社会の一員であるか」「自分の行動で国や社会を変えられると思うか」という問いに対し、日本は『肯定する意識が6カ国中最下位』であった。PISAは学習に関する到達度調査であるが、上記のように『自信がない』が6割を占めるなど、結果が類似している。でも、『自信がない≠できない』ではないよね。学校という小さな社会ではあるが、『自分達は責任ある前南の一員である自覚をもった』『自分達の力・行動で、前南を変えてきた』ことは事実ですよ。前南生は、ちょっとしたきっかけで自分自身を大きく変えられることを、身近でいくつも見てきたはず。私は前南生の可能性を信じようと思う。校長 関根 正弘